

= やる気 “want to” =

新しい年の始まり。年末から身体が凍えあがるほどの寒波の襲来を受け、まさに、身の引き締まる思いで令和3年を迎えた。残念ながら、未だ新型コロナウイルス感染拡大は収まらず、大晦日には東京で感染者数が4桁を超える状況となった。

そんな中、元旦に群馬の赤城おろし・上州のからっ風の中、全国実業団36チームによる第65回全日本実業団対抗駅伝（ニューイヤー駅伝）が行われた。三菱重工、愛知製鋼、JFEスチール、日本製鉄瀬戸内（呉地区）の基幹労連の仲間が疾走、100kmの道のりを一本のたすきでつないだ。

今年こそはと優勝を目指すチーム、歴史ある名門から初出場のチームなど、ランナーたちの力走が今年も多くドラマを生んだ。スポーツ選手に限らず声援は人に大きな力を与えてくれる。だが、例年と違う今年、コロナ禍のもとで沿道の応援・人影はまばら。

そんな中でも選手たちは皆が皆、大会開催に携わっていただいた関係者をはじめ、企業・チームメイト、家族に対する感謝の意を言葉にしながら懸命の走り続けた。とりわけ、医療関係のチームとして初めての出場を果たした埼玉医科大グループ、創部4年目での初出場で目標の20位入りを果たした。

新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、病院職員の選手たちはさまざまな思いで上州路に挑み、寒風の向かい風の中、何度も前のランナーに離されかけるたびに、大会に送り出してくれた同僚の顔を思い浮かべ、「コロナ禍で大変な中でも支えてくれた。気持ちに応えないといけない」、その思いが足を動かしたという。「医療従事者の皆さんの力になる走りを」と臨んだ初の全日本の舞台での活躍に、支えてくれた医療従事者の皆さん共々に拍手を送りたい。

そして、いま一つのチーム。手前みそになるかもしれないが36位・最後にゴールテープを切った日本製鉄瀬戸内。製鉄所の閉鎖方針などでラストランとなった今大会。創部60年目にして2000年以来、21大会ぶりの出場。神様がどこかで見ていてくれたのだろう、予選を通過し最後のランを成し遂げた旧日新製鋼のチーム。トップ富士通とは32分55秒、35位NDソフトからも15分54秒離されながらも、その熱い思いが彼らを完走させた。決して諦めることなく懸命に駆け抜けた、仲間たちとそのチームの皆さんに心からの敬意と、次なる道に向かつてのエールを送りたい。

毎年、年初めはスポーツの話題から入ることが多いが、チームスポーツでも、個人競技でも、自分一人で大事をなすことはできない。関係する面々と互いの思いを通わせ、支えあい、足らざるを補うことがあってこそ成し得る。

もちろん、自らの努力なしでは成し遂げることはできない点は労働運動も同じ。事に臨む時にどういう思いを自らが持つか…。方針や挨拶で「…をしなければならない (have to)。」という言葉をよく使うが、その内に自分自身が「…をしたい (want to)。」との熱い思いを抱くことがなくては苦しい時に挫折してしまう。

今年の3月11日には東日本大震災から丸10年を迎える、その復興・再生やいかに。AP21春季取り組み、政策実現、そして、新たな働き方や生活、私たちの運動も、いかに進化させていくのか、これからの正念場。2021年丑年、横たわる課題は多い。

With コロナは当面続くだろうが、できないことを嘆くより、今できることを積み上げていく。275,432人の仲間とともに、これら課題を自らのこととして捉えながら、牛歩のごとく、ゆっくり、でも確実に、前に進めていかなければならない…。いや失礼。前に、前に進めていきたい・want to。

ご安全に

2021年1月5日

日本基幹産業労働組合連合会  
中央執行委員長 神田 健一